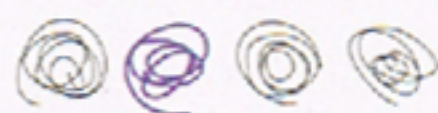


日本女子
体育大学

WILL 2006





子どものために、私のメソッドを。

舞踊学専攻への志望動機は、何？

あらためて聞くことでは、ないかもしれない。

答えは、ほぼ決まっているから。

踊りたい、踊りを続けたい、もっと、踊りを学びたい、踊りがうまくなりたい。

限りなく100%に近い人が、自分が踊ることを考えて、

ニチジョの舞踊学専攻を選ぶはずだ。

当然だと思う。でも中には、ちよつと違う動機を持つ人もいる。

柴田郁恵さんは、その1人だ。



私は、AO入試でニチジョの舞踊学専攻に入りました。

入試の面接やエントリーシートの中で主張したのは、振り付けをやりたいということでした。踊ることに興味がないわけではないんです。

小学生の頃からクラシックバレエをやっていた、今も続けています。

だから、踊ることは大好き。

でも、ニチジョに入って取り組みたかったのは、振り付けでした。

きっかけになったのは、高校の体育祭です。

応援合戦の構成と振り付けを、私が考えることになりました。

それが、みんなに喜んでもらえて、たくさんの人に評価してもらえた。

私が想像もしていなかった反応をもらえて、その時から、振り付けをする楽しさが、私の中になんと消えずにあります。

一昨年、私が卒業した小学校の校長先生から手紙が届きました。

土曜日か日曜日、小学生を相手に、学校で何かやってもらえませんか、という内容です。

それを読んで、私にならダンスが教えられる

私と同世代、ちょうど大学生になっている卒業生全員に送ったそうです。

でも、返事を出したのは、私1人。

それで、先生方とも打ち合わせをして、10月にダンスのワークショップを開くことになりました。

参加してくれた子どもたちは、1年生から6年生まで50人くらい。

子どもたちのお父さんやお母さん、学校関係者の方ももちろん、地域の方たちや卒業生も見学に来てくれて、ものすごい盛り上がりでした。

これは1回で終わりにするのはもったいないということで、12月と2月に同じようなワークショップを開きました。

翌年度からは毎月1回行うことになって、最後には、子どもたちの練習の成果を作品にして、発表会を開きました。

そんな縁で、運動会で2年生の子どもたちが踊る、マ스ゲームの振り付けを考えることになりました。

私が毎日のように小学校に通って、直接、子どもたちに振り付けをすることはできませんから、先生に振りを伝えて、先生が子どもたちに



NPO法人 すみだ学習ガーデンが主催する...

運動会当日、子どもたちが、私が考えた振り付けでいっせいに踊っているのを目の当たりにして、ビデオで撮影するのも忘れるくらい感動してしまいました。この時、振り付けと子どもという二つのことが、私の中で結びついた気がします。

母校の小学校から手紙をもらった時、子どもたちにダンスを教えてみようかな、と思ったのには、理由があります。

そのころ私は、セッションハウスというダンス・スタジオが主催する「アートマネジメントセミナー」を受講していました。

芸術を社会の中で事業として成立させる方法を考えるセミナーです。

実務編とリサーチ編の2部に分かれていて、実務編では理論を学び、リサーチ編では何か活動を行ってレポートにまとめるという内容になっていました。

その実務編で、コミュニティアートという考え方があるのを知りました。

いろいろなアートを中核にして、地域の人たちが集う場を作る。

そうすることで、地域の人たち、さらには地域

組みです。それで、あー、私にならダンスが教えられると思って、母校の小学校でワークショップを開くことに決めました。

そのワークショップから、どんどん広がっていった「初等教育におけるダンスの必要性・ダンスによって子どもの教育は変わるか」という研究テーマを見つけられて、結果的に、セミナーのリサーチ編のレポートもまとめることができました。何だか、巡り合わせのようなものを感じます。

私の中にある目標は、子どものためのダンスメソッドを確立することです。

母校の小学校で開催したワークショップ。墨田区の生涯学習センターで受けもっている、小学校の低学年を対象にしたキッズダンスクラス。いろいろな活動の中で、私が考えたことを、クラシックバレエのメソッドのように体系化して確立したいと思っています。

自分のスタジオを持つことができれば、理想的です。

そのスタジオで、自分が確立したメソッドを子どもたちに伝えていく。

それが自分の仕事としても成立することが、

そのものを、より活動的にしようという取り

夢ですね。

